

事後評価報告書（日中（MOST）研究交流「気候変動」）

1. 研究課題名：「アジアの巨大都市発展が地域から全球の気候変化に与える影響に関する研究」

2. 研究代表者名：

2-1. 日本側研究代表者：名古屋大学 地球水循環研究センター 特任教授 安成 哲三

2-2. 中国側研究代表者：中国科学院 大気物理研究所 教授 フー コンビン

3. 総合評価：（ A ）

4. 事後評価結果

(1) 研究成果の評価について

当初の研究計画に述べられた目的通りの研究成果が挙げられたことは高く評価される。また、日中両国の研究スキルやシーズ（各種モデルとデータ）を相互補完的に分担した研究計画を立て、データ解析において研究の連携が進んだことは特に良かった。

一方、研究終了報告書には研究成果の記載が発表論文毎の個別的な記述となっているが、本研究の第1の目的である「巨大都市からの大気汚染物質の排出と、その大気循環と局地・領域・全球気候へのフィードバックを定量化する」に対して、どのような成果が得られたか、あるいはその目的に対して本研究期間内でどこまで迫れたか、についての説明があると良かった。また、研究終了報告書からは、中国側から日本側への主な貢献はデータ提供であったことの様にも読み取れる。今後の中国との協力の在り方について、一歩踏み込んだ共同研究の展開があるかどうかについての検討を加え、それを実行することにより、さらなる展開に繋がられる可能性がある。

(2) 交流成果の評価について

日本側と中国側を合わせ、延べ出張日数が約 300 人・日と非常に数多くの日中研究交流を精力的に実施することにより、幅広い人的ネットワークの構築と相互理解ができたことは評価できる。上記に加え、若手研究者が自主的に研究交流を行ったことは、本事業の趣旨に合致した成果といえる。

(3) その他（研究体制、成果の発表、成果の展開等）

本課題の成果に関する発表や公表については、当初の研究計画を達成したと考えられる妥当な成果が挙げられている。中国側の貢献による観測データの取得により、日本側の研究推進がどの程度向上したかについて、もう少し具体的な数字（例えば、モデルを用いた予測や再現性についての比較検証結果など）が示されれば、このような研究交流の意義がさらに明らかにされ、今後の両国の共同研究の在り方に一石を投じることが可能ではないかと考えられる。